

天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る

—キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査(2023年)—

山藤 正敏 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員

齊藤 茂雄 帝京大学文化財研究所講師

山内 和也 帝京大学文化財研究所教授

バキット・アマンバエヴァ キルギス共和国国立科学アカデミー歴史考古学民族学研究所所長

In Pursuit of Ancient Pastoral Nomadism in the Northern Foot of Tien Shan Range:

Archaeological Research in Kegeti Valley, Kyrgyz Republic (2023)

YAMAFUJI, Masatoshi Chief Researcher, Nara National Research Institute for Cultural Properties

SAITO, Shigeo Lecturer, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

YAMAUCHI, Kazuya Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

AMANBAEVA, Bakit Director, The Institute of History, Archaeology and Ethnology, National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic

1. はじめに

キルギス共和国北部に位置するチュー渓谷東部には、6世紀におけるソグド人の進出に伴い建設されたシルクロード拠点都市の1つであるアク・ベシム(Ak-Beshim)遺跡が所在し、12世紀(カラハン朝)にかけて利用された。中央アジアではシルクロードの中世都市に着目した研究が盛んであることから、当該地域においてもアク・ベシム遺跡と近隣の関連都市遺跡に長らく考古学調査の主眼が置かれてきた(e. g., Кожемяко 1959; 城倉他 2016; 山内・アマンバエヴァ編 2016; 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所編 2020, 2021等)。他方で、中世都市周辺における遊牧民の活動については、その痕跡が捉えにくいことも影響して、本格的な調査研究の対象とされることがなかった。

こうした調査状況を念頭に、本調査はアク・ベシム遺跡周辺における古代の遊牧活動を明らかにし、都市定住民との関係性を体系的に理解することを目的として、同遺跡南方にそびえる天山山脈の前山、キルギス・アラトー(Kyrgyz Alatau)山脈の北麓に位置するケゲティ(Kegeti)渓谷において2022年度より考古学調査を実施している。昨年度は現地踏査により、小型円形遺構をはじめとする多数の遺構が小谷に沿って分布する状況を確認したものの、その年代・機能は不詳なままであった(山藤他 2023)。そこで本年度は、小

型円形遺構と平坦面を含むKGT22002を対象として発掘調査を実施し、その構造と構築年代・機能について所見を得ることに努めた。

2. KGT22002

ケゲティ渓谷は、アク・ベシム遺跡から直線で約13km南南西に位置する。渓谷を南に5km程進むと、ケゲティ川東岸に平面滝滴形の台地(東西1.9km、南北4.4km)が現れる(図1)。台地上は、北半部において東から西に傾斜する平坦な緩斜面が少なくとも3つ東西に連続しており、最大で東西1.2km、南北2.3kmの草原地帯を形成している。一方、台地上南半部には南北方向の小谷が7本程度平行しており、全体地形は南から北へ傾斜している。なお、台地南端部には緩やかな丘陵地帯が続く。

台地上南半部における最西の小谷に、KGT22002は位置している(図2)。この遺跡は、谷筋に沿って斜面上に造られた複数の遺構(KGT22002-1~9)から成る。このうち、小谷最奥部の比較的平坦な場所に立地し、小型円形遺構と平坦面から成る特徴的な遺構KGT22002-2を発掘調査の対象とした。

3. 発掘調査

発掘調査では、KGT22002-2の西半全体を掘り下げた平面規模を確定すると同時に、土層堆積状況を確認して遺構構築面を特定するために、南北方向及び東西

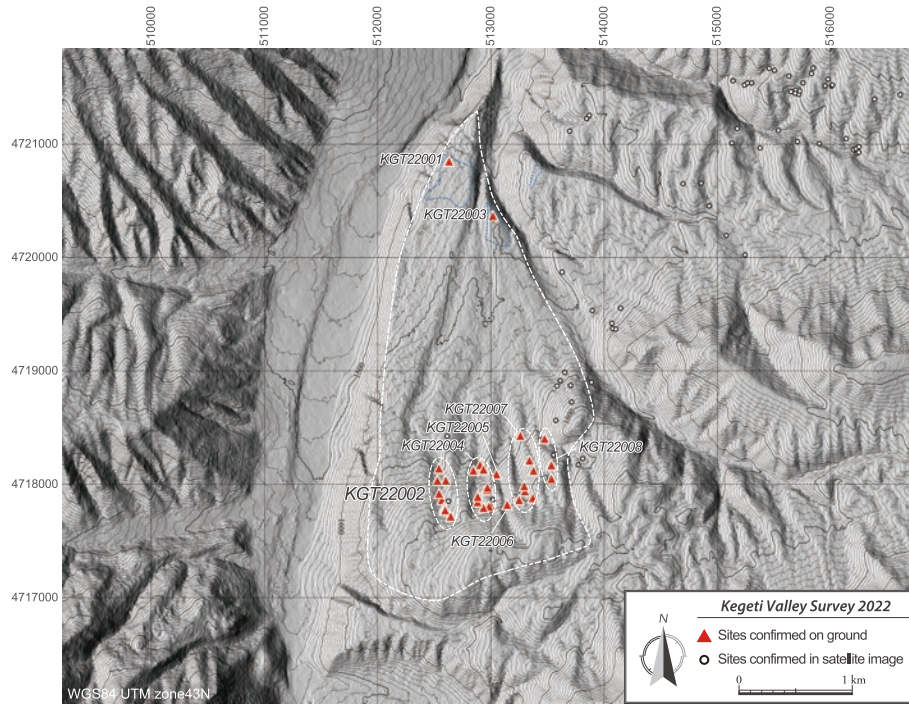


図1 2022年調査時登録遺跡の分布とKGT22002の位置(AW3D地形データに基づき山藤作成)

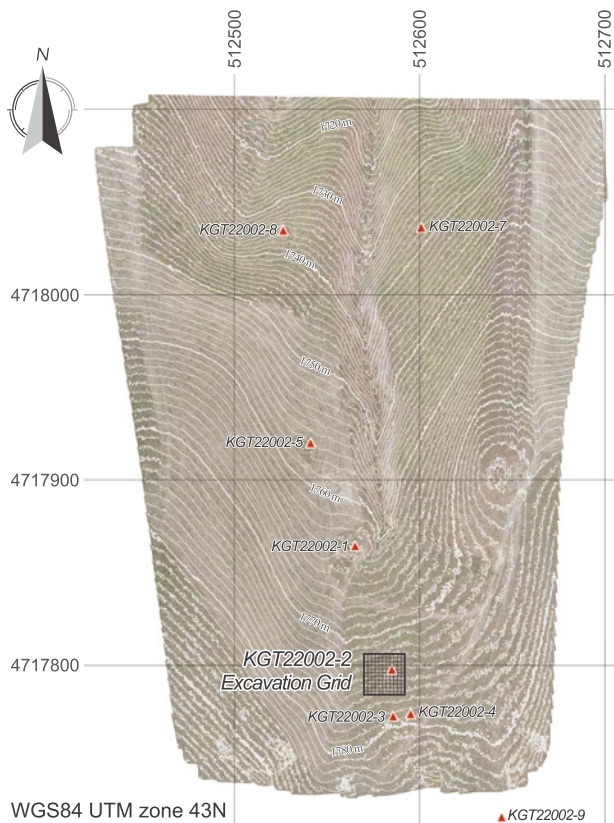


図2 KGT22002航空測量図(UAV写真のSfM-MVSによる、山藤作成)

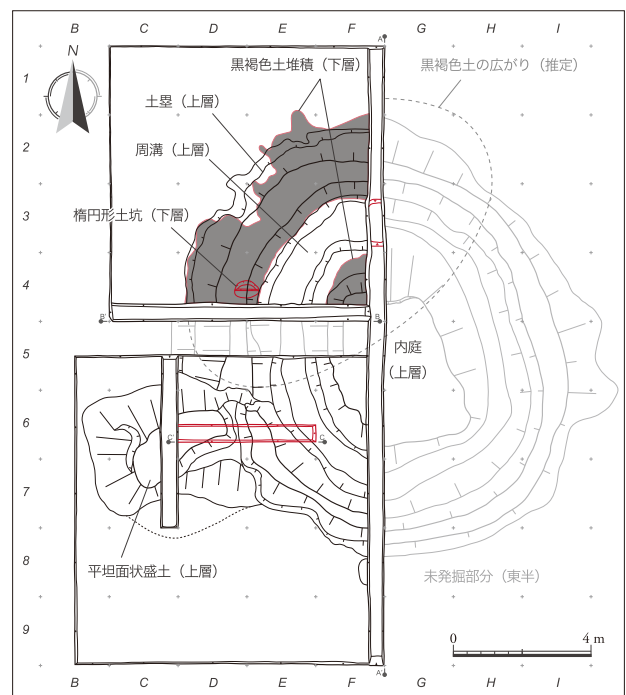


図3 KGT22002-2平面図(山藤作成)

方向のサブトレンチを設定した(図3)。調査面積は145m²である。発掘調査の結果、上層に円形遺構と平坦面状盛土、下層に黒褐色土堆積と楕円形土坑が認

められた。

上層は、円形遺構とその南西部に取り付く平坦面状盛土から成る。円形遺構は現況で、東西11.0m、南北12.6mの規模(東西幅は未発掘の東半も含む)であり、地形の傾斜方向に従って、その南北軸は北で西に僅かに振れる。同遺構は、外側を廻る土壘、その内



図4 円形遺構完掘全景(北西上空から UAV による、山藤撮影)



図5 円形遺構北側周溝の土層堆積状況(西から、山藤撮影)

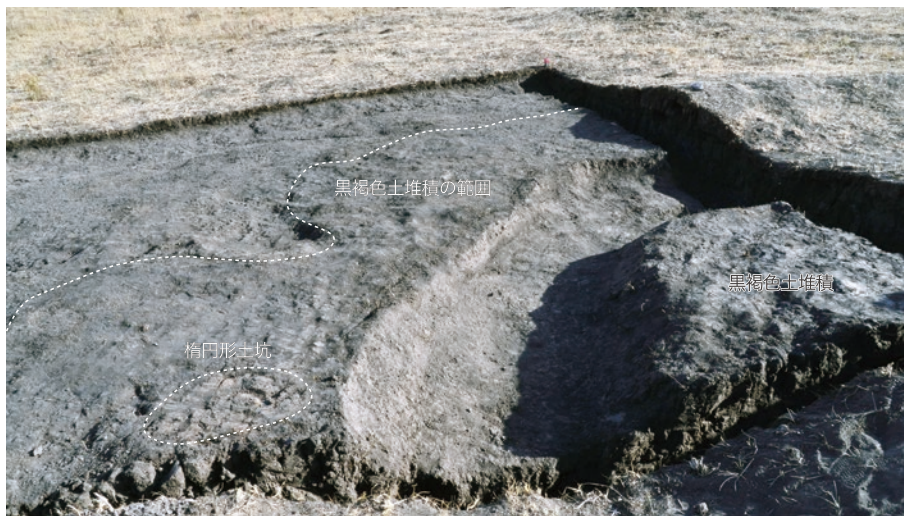


図6 下層検出状況(南西から、山藤撮影)

側を廻る周溝、また、これらの内側の平坦面を成す内庭により構成される(図4)。土塁は円形遺構の北側(斜面下方)で幅2.1m、南側(斜面上方)で幅1.6mを測り、現況で厚さ20~30cmの地山層由来の灰黄褐色シルトの盛土により構築されている。その内側に掘削された周溝は、深さ0.7~0.8m、埋土上端で幅1.1~1.5mであるが、下半部は幅0.7~0.8mに窄まる漏斗状の断面を示す(図5)。埋土は3層から成り、上層は表土と同様の細かい粒土から成る脆い黒褐色土、中層は地山由来とみられる灰黄褐色シルト、下層は黒褐色砂質土である。なお、周溝埋土上層からは20世紀以降の人工遺物が出土した。土塁・周溝の内側には、東西3.3m、南北4.5mの内庭が存在する。内庭も土塁と同様に、地山由来と考えられる灰黄褐色シルトの盛土(厚さ20cm程度)により形成される。

円形遺構土塁の南西部には、人工的に造りつけられた平坦面状盛土が見られる。この盛土は、検出下場で東西4.8m、南北4.8m、上場の平坦面は東西3.0m、南北1.3mを測り、南の緩斜面と連続している。平坦

面状盛土と円形遺構土塁を東西方向のサブトレンチで断ち割ったところ、円形遺構の土塁外縁に対して厚さ60cm程度の盛土をしていることが判明した。この盛土は少なくとも3層から成り、最も厚い最上層の盛土(厚さ30cm)は地山に由来するとみられる。なお、平坦面状盛土の構造を精査するために設けた南北方向サブトレンチ掘削時に、土器の小片1点が出土した(後述)。

円形遺構の北西部下層には、黒褐色土の堆積が認められた(図6)。厚さ5~10cmのこの堆積土は、円形遺構の土塁・内庭の盛土下に広がるが、サブトレンチにおける土層観察では、その広がりには斜面下側にあたる北西部あるいは北西半に限定されることがわかる。なお、この黒褐色土は、円形遺構の周溝埋土下層と類似している。また、この黒褐色土堆積層を掘り込む楕円形土坑(東西70cm、南北50cm、深さ30cm)を1基確認した(図7)。



図7 下層楕円形土坑半裁状況(北から、山藤撮影)



図8 平坦面状盛土下層出土土器片(外面)(山藤撮影)

4. 出土遺物・土壌サンプル

表土を除いて、円形遺構に関わる廃土のほとんど全てを篩にかけたにもかかわらず、遺物をほとんど回収できなかった。遺構の構築年代を示しうる唯一の出土遺物は、先述のとおり土器の小片1点のみであった(図8)。この小片は平坦面状盛土を断ち割る南北方向サブトレンチの掘削時に出土した。このため、出土層位が明確とは言い難いものの、状況証拠に鑑みて、平坦面状盛土の最下層(灰黄褐色砂質土)から出土した可能性が高い。胴部片であり、器厚は7mm、手づくねあるいは粘土紐積み上げにより成形され、外面全体に煤と思しき黒変と部分的に斜めの擦痕が見られる。胎土には直径1mm未満の方解石(Calcite)小片が多量に含まれている。こうした特徴から、この小片は調理用鍋の一部であったと推定できる。調理用鍋はアク・ベシム遺跡の居住層からも多く出土しており、これらと比較できる可能性もあるが、今のところ年代観につながる所見には至れない。

また、遺構の機能を探る目的で、円形遺構中央の南北方向サブトレンチの東側土層断面より6種類の土壌サンプル計14Lを採集した。

5. おわりに

KGT22002-2の発掘調査によって、円形遺構及び平坦面状盛土の構築方法・構築面のみならず、その下層に広がる黒褐色土堆積及び楕円形土坑の存在が明らかになった。遺構の構築手順についてまとめると、元来堆積していた楕円形の黒褐色土堆積に一部重複するかたちで周溝が掘削され、掘削時の廃土が土塁と内庭の盛土に利用されたと考えられる。その後、円形遺構の

土塁南西外側に平坦面を成す張り出しが盛土により構築された。

他方で、年代と機能については依然として不明のままである。検出した遺構・堆積物の年代決定は、十分な数の遺物や炭化物の出土が望めない現状では、型式学的手法や¹⁴C年代測定法以外の別手段による他ない。幸い、今回の発掘調査により円形遺構の土塁・内庭の構築面が明確となったため、OSL年代測定を適用できる可能性が出てきた。年代決定手法については、来季調査までに有効な方法を引き続き模索したい。

遺構の機能については、来年度以降に土壌サンプルの分析から手がかりを掴むことを期待している。特に、下層の黒褐色土堆積と円形遺構の周溝埋土下層の堆積物は一見して類似しており、両者が同じ用途に起因する痕跡である蓋然性を示唆している。筆者はかねてより、その機能が家畜囲いではなかったかと考えており、この仮説の検証のためには、土壌サンプルにおける糞球類やプラントオパールの存否・種類を知ることが欠かせない。

実は、KGT22002-2に類似した円形遺構はチュー渓谷南辺のキルギス・アラトー山脈北麓に広く分布しているが、その性質についてこれまで学術的に探求した形跡は認められない(cf. 山藤 2024)。したがって、今後、円形遺構の年代と機能が追求されるに及び、広くチュー渓谷南方一帯における歴史的遊牧活動の一端が紐解かれることが期待される。

著者らは、JSPS21H04984 科学研究費補助金基盤研究S「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表：山内和也)の助成を受けて本研究を実施した。

■参考文献

- ・ Кожемяко, И.И. 1959 *Раннесредневековые Города и Поселения Чуйской Долины*. Фрунзе, Академия Наук Киргизской ССР.
- ・ 城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2016 「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘(2015年秋期)調査」『Waseda Rilas Journal』Vol. 4 43-71 頁。
- ・ 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2020 『アク・ベシム(スイヤブ)2019』帝京大学文化財研究所。
- ・ 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2021 『アク・ベシム(スイヤブ)2018』帝京大学文化財研究所。
- ・ 山内和也・アマンバエヴァ, B.(編)2016 『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡 — 2011～2014年度—』独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。
- ・ 山藤正敏 2024(印刷中)『天山山脈北麓における定住—遊牧社会関係史の再構築—キルギス共和国北部、チュー渓谷西部における考古学踏査—』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所。
- ・ 山藤正敏・大谷育恵・齊藤茂雄・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2023 「天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る—キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査(2022年)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』85-89 頁 日本西アジア考古学会。